

ホトトギス 昭和二十四年三月二十八日通郵特別授承認証第六二七号
平成二十七年六月一日発行（第百十八巻第六号）

ホトトギス

六 月 号



俳句随想 〔三百九十六〕

汀子

ホトトギスの「俳句随想」を読んでご意見を言って下さる方々があり、大変有難く感謝している。考えると随分長い間、俳句を作り続け、皆様の俳句を拝見して選ばせて頂いている。今は、「天地有情」の募集句を選んでいるが、投句二句ということ、月に一度、全力投球をして下さる誌友の皆様の俳句を二句、一句（没もある）と掲載させて頂いているが、大方は二句とも選べる句であつても、二句とも同じような俳句を少し変えただけの場合はいいと思つた一句だけ採用する。誤字が多い場合も取らない。多分このようなことを間違つて書いてあるのを、私が訂正して上げたいと思うが、ご自分で気が付いて頂きたいので没にする。字が達筆過ぎて読めないときがある。随分辞書を引いたりして読んでみるが、どうしても分らない時は、やはり没にする。私の勉強不足のためにそのような事態にならないように辞書をフル回転して使う。

NHK出版の本に「選句の大事」を連載して行く事となつた。これまでの長い俳句人生の集大成として一生懸命書いていこうと思つている。「天地有情」の通信欄に次のような質問があつた。「裸木」は歳時記にも広辞苑にも載っていない語ですが、季節として用いていいのでしょうか？と書いてあり、「しばしば用いた句を見かけますので」とあつた。

ホトトギスは季節として「裸木」は使わない。「枯木」とする。或いは全体の雰囲気によければ選ばれたかも知れないが「枯木」の方が俳句の雰囲気があるかと思う。

句日記 汀子

平成二十六年六月二日 下朗句会

著莪咲けば庭に一劃生れけり
蛩に偲ぶ心を托しけり
壺に活けて十葉らしくなくなりし
これよりは美しき思ひ出明易し

六月二日 ロイヤル俳壇

狭庭には育ち過ぎたる夏木かな
目眩ふと夏めく会話途切れたる
一段落とも思ひつつ夏めきぬ

六月七日 北近畿ホトギス俳句大会前日句会

水没のマーガレットもダムのもの
六月の茅花に風のとどまらず
皆梅雨に濡れ会場に集ひけり
万緑の色を重ねて行くカーブ

六月八日 北近畿ホトギス俳句大会

喪心もまとひて梅雨の旅衣

六月十日 大阪倶楽部

会へば又旅を語りて明易し
紫陽花のはじめの色に旅歸り
丹波路は自然の宝庫風薫る
山荘に住む人のなし火取虫
考への二転三転明易し

六月十日 綿業倶楽部

五月雨の香も包まれて届きけり
鈴蘭の香も包まれて届きけり
五月雨を通り抜けたる旅衣

旅終へて又次の旅明易し
六月十二日 清交社吟行会

行程に乘らぬ滝道引返す
初鰹より会食の後半に
日当りて万緑目覚めはじめけり
ここよりは浪速一望五月晴
万緑を抜け万緑へ九十九折
滝道を登り切つたる明るさよ
この山路行けば着くてふ露涼し

六月十三日 工業倶楽部

黒南風の雲抜けて行く空の旅
時鳥聞かぬ旅路を淋しめり
時鳥鳴き渡りたる雨もよひ
黒南風の隙間に一日遊びけり

六月十七日 有恒俳句会

五月雨るる予報夕べとなる家路
いつまでも暮れぬ西空夏至近し
新しき句会立ち上げ夏至近し
咲くことは零るる未央柳かな
雨蛙鳴いて家路を遠くする
咲き増えて未央柳の車寄せ
近づけばどの葉に居りし雨蛙

六月十七日 無名会

日の出まで草取る日課つづかざる
青芒つんつみ靡く日はいつに
草取つて傷みし芝の見えて来し
梅雨憂しとせぬ明るさの家路とす
これよりの梅雨に処しゆく心あり
旅心ありても梅雨を処す心

六月十八日 夏潮句会

紫陽花に紛るる色の通りけり
動かざる如く動きぬ山椒魚
梅雨といふことを忘れてゐる家居
雨を待つ色は何色七変化
傷む芝梅雨に預けてをりにけり
降つてゐるやうで日の差す梅雨の午後
梅雨に倦むことなく庭のありにけり

六月二十日 時雨句会

電降りし虚碧の句碑の除幕式
早発ちの目覚め短夜なりしこと
着陸を告ぐ梅雨晴でありしかな
芽柳に風の行方を托しけり
早寝して睡れぬままに明易し

六月二十一日 句会と講演の会

桑の実を摘み来し証指の先
蚊帳たたむ器用自負せしこと昔
質間を受けて応へて露涼し

六月二十六日 きさらぎ句会

河鹿笛応へる音色ありにけり
毒といふ薬ともいふジギタリス
晴といふ至福の時間梅雨半ば
ジギタリス毒が咲かせてをりにけり
梅雨雲を抜けたる富士の現るる

六月二十七日 アネモネ句会

薫風に心さらはれさうになる
夏至過ぎしより刻々のありにけり
縦の風横の風来る藤椅子に
飛機揺れて今梅雨雲に入りしかな

六月吉日 田治紫様句集序句

紫の似合ふ涼しき汝が心

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十六年六月一日 野分会芦屋例会

皐月富士とは黒々とくろぐろと
雨蛙には広過ぎるの掌

喪心をもて皐月富士仰ぎけり

六月二日 NHK学園神戸市俳句大会選者吟

港町涼しく未来重ねねゆく

六月二日 百夜句会

日歸りの葬の旅とは明易し

喪心に四龍は色を沈めけり

積み上がる高層ビルの灯涼し

六月三日 カトリック新聞選者吟

たましひを茅花流しに乗せ逝かれ

六月五日 蕉心会

これよりは四葩に主役譲る街

梅雨兆す館にほつぽつ咲けるもの

額の花人を拒んでもある葉陰

喪の旅も賀の旅も西明易し

水輪てふ楽を奏でてさみだるる

大江戸もついたりしました芭蕉さん

黒南風に色を変へゆく館の庭

フェイジョアは未央柳の伴として

六月六日 六甲会

名園の青鷺主の顔をして

故郷に近づく程に風薫る

薫風に磨かれてゆく窓の景

ラファエロにミケランジェロに風薫る

喪の旅を終へ薫風の旅となる

薫風の集まつてゐる年尾像

六月六日 虚子記念文学館投句

薫風や予期せぬ旅となることも

六月七日 北近畿ホトギス俳句大会

万緑に吸ひ上げられてゆくダム湖

老鶯に山気解けてゆきにけり

諦めることが肝心梅雨にけり

栗の花ダムの高きに香りける

蛭川昨夜の余韻を流しつつ

虚子を知る泊雲を知る人涼し

現世の端に螢火ありにけり

六月九日 朝日カルチャー若草句会

勝馬の背中尖つてをりにけり

箒目の起伏宥めて南吹く

摩天楼天辺磨き大南風

京都駅四番ホーム南吹く

冷奴子規庵訪ひし昂りに

鞭の音高らかに勝馬となる

六月十日 十筆会

翡翠の一閃に魚飛び出せり

偲ぶ人多き丹波や花檣

喪の旅を終へて都心の青嵐

雨も又景引き締めて花菖蒲

翡翠の現れて消えゆく水の黙

六月十日 俳句とく咲く収録

告白の手よりぽとりとさくらんぼ

さくらんぼ先づ桐箱の香より来る

六月十六日 北國文芸選者吟

螢火を見下してゐる生活の灯

六月十九日 登高会

仏法僧鬼も聞くてふ大江山

雪の下句碑の庭てふ落着きに

蝸牛三メートルの長旅に

蝸牛かつて雨男と呼べれ

蝸牛角は宇宙をさ迷へり

ほんたうは殻を脱ぎたき蝸牛

六月十一日 ホトギス社句会

蚊帳吊つて現世少し遠ざかる

夏至の句座君の質問もう聞けず

蚊帳隔て羽音の悔しがつてをり

桑の実の色の弾んでゐる菌塚

嫡男といふ母衣蚊帳の主かな

六月十二日 野分会東京例会

皐月富士車窓に嵌めて又西へ

雨蛙丹波の夜を引き寄せて

雨蛙人の生活を借りまして

六月十四日 若水句会

喪心に皐月富士どは模倣として

著我疊この道行けば会へる人

蝮蛇出て六甲らしくなりけり

皐月富士山の生活の動き出す

著我疊より丹波路の始まけり

山の子に遊ばれてゐる蝮蛇かな

山男蝮蛇をひよいとつまみ上げ

六月十五日 目黒学園句会

蚊遣火といふ山荘の馳走かな

夏の蝶影より黒く現はるる

木下闇月輪拒む深さかな

子の寝息聞きつつ蚊遣焚きにけり

たましひの吸ひ込まれゆく木下闇

六月十八日 「玉藻」千号記念祝賀会

梅雨傘を閉ぢて祝ぎへの一歩かな

廣太郎選

神戸後藤立夫

同

同

長岡安原葉

同

同

熱海嶋田一步

同

同

福山竹下陶子

同

同

八尾山下美典

同

同

神戸山田佳乃

同

同

徳島岩田公次

同

同

熊本岩岡中正

同

同

神戶 涌羅由美

同

同

香
川
湯
川
雅

同

同

東京橋本くに彦

同

同

同
大久保白村

同

同

神戶藤井啓子

同

同

奈良古賀しぐれ

同

同

雑詠句評（五月号より）

静 龍・憲明・中正
眞理子・むつみ・保佳
肖 子・とほ歩・美奇
葉 廣太郎

お薬の白く小さく寒かりし 東京 今井千鶴子

一病息災という言葉があるが、年齢を重ねると何かしら病院へ行きお薬のお世話になる回数が多くなる。

作者も養生のためお薬を飲まれる事を医師から勧められたのであろう。今、掌にのっている小さな白い玉の薬、この薬に命を託すのであろうか。否、飲み続けなければ命を短くするものと思えば、簡単に止める訳にもいかない。飲み続ける白い玉の薬が愛しくも思える。

命を託し薬を飲み続けなければならない、その心情を「寒かりし」と表現した。その言葉が読者に共感を与える。（静龍）

誰でも子供の頃から薬にはお世話になっているだろう。筆者も

子供の頃、粉薬の不味さに辟易した記憶があるが、現代では錠剤が主流で、飲み易くなったとはいえ、やはり薬のイメージはどうしても病氣と繋がってしまう。御恙の作者の実感として季節が見事に語られている。（廣太郎）

クリスマススイブ病棟の灯よさらば 奈良 古賀しづれ

病棟にも、クリスマスツリー（聖樹）が飾られ、あすのクリスマス誕生を祝う気に満ちている。丁度その日に退院が決まって、家に帰ることになった。「灯よさらば」というのは、そういうことであろう。そのことを待ちのぞんだ生活ではあったが、いよいよ退院となると、尽くしてくれた病院の人々や同部屋隣の人にも名残が尽きない。そういう気持ちをそのままにこめた。本人にとっては、生涯忘れない日となった。句の内に、こころがこもっている。（憲明）

入院をされておられた人が退院をされたのが丁度クリスマススイブであったのだ。それまでの不自由な生活から、何時もの生活に戻る喜びがひしひしと伝わってくる。何ともタイムリーな時期に退院出来たという、二重の喜びも、下五の「さらば」という存問に込められている。（廣太郎）

天地有情

峙てり昨夜の新雪着たる富士
 厳寒の峙つ富士に襟正す
 組み立てたやうに桔梗の開きけり
 醉眼にいざよふ月の定まらず
 初夢のみんな幼くありにけり
 もう二日まだ二日とて過ぎにけり
 論客にすこし離れておでん酒
 あつといふ間に日が暮れる年が行く
 日当つてをらない寒といふ言葉
 もう春の来てゐるみどり蓬餅
 園丁のつぶやき冬に入りにつけり
 名苑の余白冬紅葉の余白
 一枚の紙の如くに蝶凍つる
 日脚伸ぶ東京タワーまだ暮れず
 わが鬼の数の知れざる豆を撒く
 煩惱の闇の奈落へ豆を撒く
 なには先づ虚子の話をして御慶
 今年まだ温泉プールにゐて御慶

長岡 安原 葉
 同
 東京 稲畑廣太郎
 同
 同 河野美奇
 同
 熊本 岩岡中正
 同
 神戸 後藤立夫
 同
 大阪 佐土井智津子
 同
 龍ヶ崎 今橋眞理子
 同
 福山 竹下陶子
 同
 熱海 嶋田一步
 同

叡山の肩なだらかや日脚伸ぶ
 かりそめの影をひきたる寒牡丹
 琴の音は春の海なり初詣
 初暦日数たつぷりあるはあり
 なやらふやどこかに月の気配あり
 ひさぐに二月礼者となりて会ふ
 若葉風音が光となる水面
 この家の未央柳ももう散りぬ
 海原を一気に染めて初日かな
 初日浴びしみじみ握手君とわれ
 一水を挿みてよかり初紅葉
 クローバーを雑草なりと言ひ捨てし
 枝分れしつつか枯木となりぬ
 枯木みなこちらを向いてゐたりけり
 かまくらに入りてより皆賢き子
 マスクせしままのウインク気付かれず
 初暦一と日一と日をいとほしく
 春時雨句碑建立の浜清め

東京 山田閨子
 同
 吹田 大橋 暁
 同
 東京 今井千鶴子
 同
 同 今井肖子
 同
 神戸 長山あや
 同
 同 後藤比奈夫
 同
 群馬 中杉隆世
 同
 淡路島 高田菲路
 同
 同 木下圭子
 同

子選

ひんがしに

稲畑汀子

三が日が過ぎると一月は駆け足で過ぎて行く。仕事の山は一向に減ることがなく、年末迄に何とか溜まりに溜まった句稿を全部お返しすることが出来たのはよかったが、又新たな山が出来て行く。

一月の旅は毎週金曜日の朝日俳壇の選句会の他は、「年尾先生を偲ぶ初旅」だけである。今年は富士山のホテルマウント富士が会場になるので、参加者が何時もより多かった。

三島から二台を連ねて山中湖へ向かうバスは何時ものお馴染みのバス会社で、添乗員も毎年お馴染みの女性である。俳句もだんだん上達して句会を楽しんでいる様子であった。富士山の頂上辺りの雲はなかなか退かなかった。高速道路の須走から長いトンネルを抜けて山中湖に出ると、さすがに雪が積っていて千メートル近く裾野を登って来た実感があつた。静岡県側の富士山は駿河湾から吹きつける風で山裾近くまで雪に覆われていたが、山梨県側になると三分の二程が雪に覆われていた。山中湖から吉田に向かうと河口湖に出る。山中湖よりも岸辺が凍っていたが、湖面には白鳥が点在していた。昼食を済ますと三々五々忍野八海を吟行する。私は早々とバスに戻った。富士山の頂上だけは中々雲を脱が

なかった。ふっと吹けば消えそうな雲である。ふたたびバスは山中湖へ戻り、百米ほどの九十九折を登ってホテルに着いた。一句会を終えて各自部屋に落ち着いた。

「明日の朝はきつと富士山が見えるわよ」

寒い時期は朝の富士山は大抵よく見えるという。

「明日の夜明けの富士山を見なければ」

私は同室の妹に声を掛けた。

アサヒカルチャーの初授業は、「今年の抱負」と題して皆さんに話をして頂くことになっていた。年末の「今年を振り返って……」は前の座席の人から話して貰ったので、後ろの座席からということにした。残りの時間は「虚子百句を読む」である。

「これは私が読みます」マイクを使っても皆の声が小さい。

「今日は虚子の俳句『ひんがしに日の沈みゐる花野かな 虚子』という一句ですね」

私は声を張り上げ一字一字丁寧に読んだ。

「この句を見て、え？と思う人が居ました。日は西に沈むですよ、ね、という人が居たのです」

「これは、日が沈みたるではないのですよ。日の沈みいるです」

「さあ、今から、私が昨日旅で見た話を致しましょう」

「二昨日、初旅で山中湖のホテルへ行きました。次の日、朝食が

句会場へと急いだ。

六時半からバイキングということで、まだ薄暗い一階の食堂へ皆降りたのです。薄暗い夜明けの西の空にくっきりと雪の積った富士山がそれはそれは美しく見えていました。食堂からすぐ庭に出られるようになっていきます。庭に出るとマイナス十度です」

「うへえー」

「バイキングなので御馳走を大皿に山盛り取って、席を確保すると皆はそろそろマイナス十度の庭に出たのです」

「やがて、東の空がぼつと赤くなつたかと思うと、それに応えるように西側の富士山の雪が赤く染まり始めたのです。赤い色が徐々に濃く、そして薄くなったと思ったら太陽がすっぱり現れて富士山の雪の赤い色が白く戻りました」

「皆さん、私が何故このような話をしたか分かりますね」

「ひんがしに日の沈みぬる花野かな 虚子」

「この俳句の東は、これから太陽が出てくる時なのです」

虚子のこの一句の説明になったことが嬉しかった。

「『ひんがしに日の沈みぬる富士の雪……』ですよ」

マイナス十度のホテルの庭に長くは居られなかった。朝食を忘れたように庭に出ていた我々は暖かい食堂に戻って朝食を取った。

朝食を済ませるとまたもう一度庭に出て行く人もいたが、私は

